

翻刻『尊氏將軍二代鑑』(上)

翻刻の会

一、底本には、大阪府立中之島図書館蔵の七行一〇三丁本を用いた。

上演 享保十三年(一七二八)二月朔日初演。大坂豊竹座、座本豊竹上野少掾。

作者 並木宗助、安田蛙文

奥書 豊竹上野少掾

版元 正本屋九左衛門

二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。

1 本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類等では改行しなかった。

2 各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を()で示した。

3 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。

4 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。

5 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。

6 特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。

7 畳字は、平仮名は「、」、片仮名は「、」、漢字は「々」に統一した。ただし、「く」はそのまま残した。

8 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。

9 底本の不明箇所は適宜同板の他本で補ったが、特に断らなかつた。

三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会(学部学生の研究会)の会員によってなされた。

小野貴久、北上真生、鈴木統太郎、吉田桂子

文字譜、改行、本文の最終確認は山田和人が担当した。

※ 翻刻の続きは次号に掲載の予定である。

なお、大阪府立中之島図書館には、翻刻の許可を御快諾賜まりました。記して感謝申し上げます。

(山田和人)

尊氏將軍二代鑑

作者

並木宗助
安田蛙文

覆おほふ外なきはきは天の徳とく。載のせて棄すてざる地の恵めぐみ。是のに則のつとる妹背いもせの道みち。陰陽いんやうの氣激げきする時は。雷いかづち百里おどろかを驚おどろか。婚こん姻いんの礼れい乱みだりなれば殃わざはひ一朝いちやうに来きる。誠まことに人倫じりん王教わうけうの始はじめ。是のより出いる君きみと臣おみ。体かたちに随したがふ手てのごとく。足利あしか一家いけの武功ぶこうにより。天あま津つひつきをしろしめす。九十七代かじゅうしちだいと輝かがやきし。光明院くわうみやういんの御代みよにこそヲロシへ民たみも豊ゆたかに。靡なびく(二才)なれ。

比ひは師走ししほすの十日じゅうにち余あまり。南殿なんてんに出いつ御ごあり万機ばんぎ百司ひやくしの政まつりごと延喜えんぎ天曆てんりやくの跡あとをおひ。聖徳盛せいとくさかんにましまして帝道ていどうに塩梅えんばいたる。左大さだい臣おみ経通けいみちう公こう年老ねんじやう給たまふ与奪よとくにより。共ともに扶翼ふよくの右大臣みぎおみ藤原ふじわらの具親ぐしん。飽迄あきほこり威いをてらし。星ほしの数かずにぞ班列はんれつ有ある。階下かいかに詰つめし武ぶ家方けは。先まづ將軍かうん尊氏そんじの舍弟しゃてい。足利あしか左馬さば頭かみ直義ちよくぎ欲心よくしん不敵てきの勢いきほひは。人ひともゆるさぬ勇者ゆうしやの体てい。続つづて尊氏そんじの嫡男ちやくなん。足利あしかの義よし詮のり。今年ことしいまだ十三歳じゅうさんさい。相隨あひまふもの、ふは。塩治しんぢ判官はんくわん高貞たかさだ。勅ちよく(一ウ)に應おうじて参内さんないし。各おの田座でんざ敷嶋しきしまの。道明みちあきらけき

世よ々の君神きみかみの。裔みすへと仰あをむなり。

左大臣さだいじん経通けいみちう宣旨せんしの趣おもひ承うけはり。義詮よしのりに向むかはせ給たまひ。誠まことに先帝せんてい後醍醐ごたいごの天皇てんかうは。当たう今ぎんと御中ごちゆうあしく。月卿げつけい雲客うんかく諸大名しよたみ二三方にみふたはたに

引キ分れ。度々の軍に年月を積。新田義貞三河の国。矢矯の里に軍勢を屯。都を責んと謀し所。義詮塩冶が対陣して。新田を越前へ追払ひ。義貞既に亡びし上に先帝も崩御有り。天下一統に定ること。偏に汝主従が軍功のなす所。先義詮への恩賞には征夷將軍となし給ふ。帝の(二オ)えいかん有り難く。勅答せよと宣へば義詮猶も頭をさげ。某いまだ弱年身の。將軍職を賜ること。父尊氏が跡を継有りがたくは存すれ共。其器に足す恐れ有りとおとなしやかに言上有ル。塩冶は後に心せき早くおうけとす、むる体。叔父の直義つ、と出。ホヲ義詮尤の勅答。征夷將軍と云は。日本武の尊より始り。史韓の才藩鎮の器量なくては。中々勤る職にあらず。申ヌは過言に似たれ共。某先手大塔の宮を擲にし。大半乱れを静てより。内にはあれ成ル右大臣具親公。玉体を守り給ひ。外には此直義が(二ウ)帝都を急度しゆごする故。其本に聞おちして新田が大軍都へ来らず。末の軍にかちたるとて。將軍と成ル手がらにあらず。万一おうけ申シなば尊氏の名を下す。叔父甥の中なればかくいふも汝が為と。我身に望む將軍職。日比こんいの具親に。めくばせすれば打うなづき。今直義が詞のごとく。凡大将たる者は。謀を帷幕の内にくぐらし。勝ことを千里の外に決す。直義と義詮と一ト口にはいはれぬこと。其身の不肖をよく知て。義詮辞退の其上は。早く退出致せよと。詞の内より塩冶判官。直義朝臣をめかど(二三オ)に立テ。最前よりの御詞。甥君を悪く云いなし。將軍職の器量なく。此度の勝軍もさのみ手がらにあらざる条。主君が恥辱と罷成ル。いか成ル人か其器に備り何故に功なきぞや。返答によつてしあん有り承はらんときめ付る。直義バツタとにらみ付ケ。一家の主人の某に気色する慮外者。右大臣具親公の只今の御意を聞ずや。己レごときが詞をかざり。いかやうにいふとても数ならねば論は無益。義詮を伴つて早く帰れと。いはせも果すかツラくと笑ひ。勅によつて参内せし主従。横合いよ

りの詞を受。立帰るは却て無礼。よし〜(三ウ)上は明かなり。勅を乞受奉り。主人が一分立べしと。立あがつてよらんとす。直義朝臣声あら、げ。せひ帰らずは引ッ立んと。勢ひか、れば塩治もたまらず。既にかうよと見る所を。義詮頓而かけ隔り。双方を押なため。某父尊氏の教を受。万人の敵にあたること其榮有りながら。若年と見あなどりさみせらる、はおちごの御ひいき。必争ふことなかれと。塩治をせいしていためる詞直義義こらへず。十二何万人に敵するとや。せめて某一人に敵して見よとあざ笑ふ。お望みならば木太刀を以て。某が小腕を試給ふべし。それ〜と宣ば檢非違使が用(四オ)意の木刀。直義朝臣と義詮の。前に置きてぞ引キさがる。

直義是こそ幸なれ。擲殺してくれんづと。おとなげなくも立向ひ。汝が詞一理有り。遠慮なくふん込で。叔父といはせず打ふせよと。あざむきながら居合イこし。互に声かけ立向ふはめざましかりけるへ有さまなり。

上には具親目もはなさず。塩治は後に心をはり。一字口伝の木劍も是にはやはか。及ぶべき。弱年ながら秘術の太刀に直義朝臣。あなどりかねて見へける所を。勅誕成ルはしづまれと左大臣の御声高。ハツト二人は相引に左右へわかれて畏る。

帝は遥にゑい覽有り。朕万乗の(四ウ)位に即。一事の善をも賞せずんば有べからず。尊氏が柳營の根を継者。義詮と見る故に征夷將軍に任じたり。され共十五に成迄は鎌倉をよく治め都のしゆこは直義たるべし。其時節に及びなば直義と入りかはり。京都の將軍たるべしと。宣旨は重く身に余り。義詮卒に領掌あれば。直義朝臣ぜひもなく共に勅答申さる、。

帝重ねて宣ふは。塩治判官高貞は。此度弱年の大將を扶。水よく船を浮へることく。忠心武功かんずるに余り有り。雲州

石州吉備の国は。先年汝が討取て西国のおさへとなれば。所領は中々珍らしからず。(五オ) それ塩冶への賜物と仰を受けて
経通公頼而へ御前を立給ひ伴ひ出る

姫君は。あてやかにうるはしく。毛嬙西施も面ヲを恥鏡を覆ふ御粧ひ。早田の大納言道兼卿の御娘。見る目もたはむ篠の
目姫。いか成ル宣旨と白露の。花にこぼる、ふぜいなり。

御簾間近くしの、めを召れ。去ぬる月五節の舞を勤めしこと。百官こそつて賞美せしを。父大納言此世にあらば。いか
計悦ぶべきに。みなし子と成ル不便さいとをしみ他に異なれば。頼もしき夫を撰後安くなしてゑさせん。ヤア判官高貞。

其方への恩賞は是成ルしの、め姫成ルぞ。古三位頼政が。いづれ(五ウ) あやめと引きわづらひしは。さのみ姿の勝れぬ
にや。賜物は似たれ共花あやめにもすぐれしは。杜若の貞よ花。塩冶が手がらを顕す為。今よりはしの、めを貞よ姫と名

を改め。吉日を多らみ宿の妻に送らんと恵の深き御詞。姫君は何とやら面はゆげ成ル御有さま。塩冶は猛きもの、ふの思
ふ子細も有りながら。時の誉れを有難く頭を。さぐる計也。

右大臣は姫君に兼て心をかけし故。思ひよらずと胸さはぎ。憚りなくす、み出。コハ心へぬ宣旨かな。武家に官女を賜るは
尤規模の恩賞ながら。是は塩冶が賜つて何のせんなき子細有り。君はしろしめされずや。あのしの、(六オ) め姫は大な

ごんが娘にあらず。何者の子也共分明ならず候と。聞て驚くしの、め姫。なふ具親公何自に意趣有て。かゝるひがこと
宣ふぞや。帝様を始メとし皆きこしめす手前も有り。ゆくゑもしらぬ娘とは我身に重て覚なし。サア何故ぞそれ聞ふとせり

かけ給へば。イヤサ様子は外になし。早田の大なごんが妻は小産を遂。其砌賤しき者の子をもらひしと密に聞ク。然ら

ば親は誰レ共しれず。大なごんの子でなき者を。塩冶地ウに賜り何の益益キ。ぜハルひ此ハルことは御無用と。聞はつりしを幸に。妨さまたぐるこそ心づよけれ。

地色中しの、姫は兼てより忍ハルび妻有ル身なれ共。勅定といひ一ツには(六ウ)賤いやしき胤ムスといはれては。先祖ぜんぞの瑕瑾かきんと言イつ色のり。

詞ナウさがなや具親公。故なき娘と偽言いつはりごと。慥地中なせうこ侍ふか。父母ハルもおはせぬ故。あなどり給ふかうらめしやと。帝ウの前も

忍ハルびかね伏ヌスデ沈シメみたる有さまを。経通公地ウの御ウはからひ歎なげきは玉座へ恐れ有り。ひらにハルくと仰に随まひ。官女達にいざなはれ

後の殿うしろに入り給ふ。

地色中重ねての勅定色には。何者詞の種たねにもせよ。朕ちん今か貞ちんよと名を改め。塩冶が妻となすからは恩賞不足はよもあらし。弥義詮地ウは將軍

職暫しほく鎌倉に下るべし。直義塩冶兩人は都ハルに留とどまりしゆごせよと。御ハルれん遥はるかに入り給ふへば皆々ハツトうづくまり。身に

ひハルゞ(七オ)きたる論言りんげんに。具親も直義も共に怒れどかひもなく。運うんは義詮帝より妻を賜るふしんぎの塩冶。互ウに礼義を尽

せ共。底そこの心こころにゆだんなく。劍つるぎを歩あゆむ足利の。榮さかぞ。長く三重へ伝つたりぬ。

地色ハル右大臣具親は貞ウよの前に心をかけ。思ウひもよらぬ勅定にて塩冶が妻中になりしこと。猶なほ逆さかしまに憤うきり何とぞ貞ウよを盗ぬすむべき。

人のちゑかる心の友。足利直義頼んとけらい犬養玄馬いぬかひげんばをつれ。寒風かんふうはげしき朝朗あさなげ。是も君故かちはだし。主従二人それと

なく。野道ノヂをまはつてあゆみ行く。

地色中折マもこそあれ向ウふより。直義が執權しつけん測はかり伊賀ノ守景かたゞ。(七ウ)供をもつれず只一人。互ウにそれと見るよりも。悦うび顔に

近くより。ヤア景忠かげたゞと声かくれば。コレハ詞く具親公。それ成ハルれは玄馬殿。某地ウ只今おやかたへ参る道。ハテよき所で御対面

と。高位かうみを敬うやまつひ平伏へいふくす。イヤサ礼義れいぎに及およばぬ。我われレとても直義ちきよに頼度たもよきこと有あつて。主従しゆじゆか様に密ひそかの出立でだち先汝せんにに子細こさいを語かたらん。あたりを見よと三人さんにんが。見廻みまわし立集たつまり。右大臣みぎのちじん小聲ここゑに成なり。某常たがひ々大おほなごん道兼みちかねが娘むすめ。只ただよ御前ごぜんに心をかけ。折せを窺のぞふせんもなく。帝ていよりの恩賞おんしょうとして。塩治しよぢ判官はんくわんが妻つまに賜たまひ。師走ししゆの果はに祝言しゆげんとて。ものゝふ共に興こしを守まもらせ。今日けふ塩治しよぢへよめりし（八才はちさい）上うへは我われ恋こいつか叶かなはんと。無念むねんきつくはいやむ時ときなし。それ故ゆゑ直義ちきよの智略ちりやくを頼たのみ。只ただよ姫ひめをうばひ取り。身みが手てに入い入いと思おもふから。人伝びとならず出立でだちたり。汝身なんぢみがやかたに来きるとは。心こゝろしりの直義ちきよ朝臣あそ。定さだて只ただよがことならん。サアサアくどうじやと主従しゆじゆ二人ふにん。小首こびしかたふけ聞きたがる。

渡わたりに船ふねと測辺はかべが悦よろこび。御賢慮ごけんりよのごとく只ただよをうばひ参まゐらせんと。主人しゆじん某工夫たがひくふうをこらし候所まち。何なんぶん塩治しよぢがたくましきに。けらい八幡はつぱん六郎むろと申まをす者もの。中々ちゆうぢゆう手てにあふ者ものにあらず。いかゞはせんと謀はかりしに。ナフ究竟くつぎやうのことこそ候まをへ。某塩治たがひしよぢが在京けいけいのやしき。案内あんないはよく知したり。こよひの祝言しゆげんを幸さいに石打いしうちに（八ウはちう）ことをよせ。只ただよ御前ごぜんを盗ぬすむこと。仕課しおほせんはあんの内うち。具親公ぐしんこうの御望ごぼうさへ叶かなへば。主人しゆじん直義ちきよが日比ひひの願ねがひ。將軍職げんじやくの御繪旨ごゑしを。申まを受うて賜たまはるべし。然しからば將軍義詮げんじやくしゆん。塩治しよぢ諸共しよぢしよ討亡うちなし。四海しよかいの内うちは御兩所ごらうしよの。心こゝろに任せぬことはなし。はやこと急に候まをへば。只今ただいま直ちきよに御心腹承ごしんぷくはらんとのべにける。

右大臣みぎのちじん大きに悦よろこび。扱あつかひいかい心遣こころづかひ。成なル程直義ちきよ願ねがひのごとく。將軍職げんじやくの御繪旨ごゑしを申まを下くだしてゑさせんと。命いのちにかけて違ちがひなし。イテ直義ちきよの館やたへ行いキ。猶なほも契約けいやくかためんと玄馬げんばを打連行うちづらんとす。伊賀いが守まもは押おとゞめ。御得心ごとくしん有あル上うへは主人しゆじんが館やたへ御出ごでは無用むいよう。其子細こさいは。某たがひが相役高あひやくたか武蔵むさし守まも（九才くさい）師直しちくは海共うみとも山共やまともしれぬ心底こぞ。かれには主従しゆじゆ心を置おキ。今日けふの内談うちだんも師直しちくにかくさん為な。某一人密ひそかの出立でだち。もしさとられてはあしかりなん。是こゝろより直ちきよに御歸ごきりと。云いにほくく打うちうなづき。心底こぞ

しれぬ師直に。包むと有は尤々。こよひの加勢には玄馬をも遣はずべし。汝宜敷下知せよと。聞クより玄馬す、み出。双方の御願ひ道にてあふたり叶ふたり。かゝる智略を聞からは是より君の御供して。帰るやいなや一ツさんに。測辺殿と一手に成り。塩冶が在京のやしきへ取りかけ。無二無三に石打立テ。御望を叶へんと。後先きらぬ無法の詞。ヲ、いさぎよし頼もしと。そやしあふたる主従の。(九ウ)揃ひも揃ふおろかさよ。

伊賀守は聞よりも。血気にはやらばあやまち有り。何ことも密に〳〵壬生の堂にて待合せ。相図を定め打立べし。刻限は子の時ぞと。わるぢゑ悦ぶはやがてん。三人よれば文盲の。道にちがへる談合しめ。いさいは後刻。おさらばといさみ。す、んで三重へ別れ行

娉すれば妻と成り奔れば妾と成ルとかや。塩冶判官高貞は参州矢矧の軍功により。帝ゑいかん浅からず。早田の大なごん道兼卿の御娘。しの、め姫と聞へしは。百の媚有ルかたちとて其名を貞よと改め給ひ。塩冶が妻に賜りて館へ入し花嫁に。

こよひ定まり御祝言公家高家方(十オ)大小名。ことぶき祝ふ進物の。数も万ッ代千代の種。取次ク隙はなかりけり。

家中ざ、めく其中に。家老八幡六郎長房。女房立チ野それ〳〵に。儀式まかなひ立出る。折から告る奏者番傍近く畏り。主君の御舍弟四郎左衛門ノ尉高則様。一チ月のお暇給はり。有馬へ湯治なされし所。御祝言と聞シ召シ。こよひ御帰宅遊ばす条。先達て飛脚到来。宜敷ク御披露と相のべて。奏者は広間に出にけり。

八幡六郎打悦び。アレヲきけ女房。主人塩冶殿は御舍弟へ仁心深く。此度湯治のお暇は。落葉山の雪見をかけ。御遊興ご無日チ。御他行の其内に。思ひよらぬ(十ウ)御祝言。御しらせ申すやいなや。早速御帰りなさる、こと。親兄の礼を重んじ

給ふ。もと腹がはりの御中なれど。道の道たる御兄弟と。主思ひ成ル夫の詞。聞て女房打うなづき。塩冶様のお手がら故。帝様を仲人の祝言。他家他門さへ羨むもの。弟御よ高則様お悦びは尤と陰ひなたなき物語り。

暫く有て表使イ。主君の御舍弟御帰宅と。しらせによつて六郎頼而さし心へ。コリヤく女房。御前ンにも御待兼。御入来を申し上よ。早くくとおくへ追やり。其身はお次の広庇廊下口迄出向ふ。

塩冶の舍弟同名四郎左衛門ノ尉高則。旅装束を改めて入り来れば。塩冶判官儀式(十一才)の袴きかざりて。のしくと立出。ヤア左衛門ノ尉高則。湯治の保養をさし置きて。こよひをことぶく到着。判官が満足と。詞の内も頭をさげ。誠や過に

し矢矧の軍は。將軍家の御在陣。新田が取り巻危かりしを。このかみの武勇により。大敵を越前へ追払イ。卒に新田も討死し天下一統に罷成ル。只よとやらんを賜るは家の面目世の聞へ。千鶴万亀を重ね。ますく祝ひ奉ると。敬ひ恵む兄お

と、武家の。礼儀ぞ見ごと成ル。又告来る取次キ役。御前途に頭をすり付ケ。右大臣具親公より進物の使者。雑掌犬養玄馬となりの。直に御祝詞のぶべきよし。(十一ウ)通し申さんやと窺へば。塩冶判官ふしんの体。右大臣具親は禁庭にても

此祝言。妨し行跡何とやら心よからぬ高官の使者。通さぬも憚リ有リ。某はさしひかへん。兩人宜敷はからふべし。其使者是へ通せよと塩冶は奥へ入り給ふ。

かくとしらせの取り次を聞クや聞カずに咳払い。歩むをうなる犬養玄馬。伊賀ノ守が相図をちがへ。先キがけしたる無法者。覆ひをかけし進物を。けらいに荷はせ座上に居。己れも高く座に付ケば。八幡六郎謹んで。具親公の御使者御苦勞至極。主人対面有べけれど。祝儀に取り込其義なく。自由ながら是成ルは部屋(十二才)住にては候へ共。則塩冶が名代として。舍弟

四郎左衛門尉ノ高則。かく申スは家老八幡六郎と申ス者。御口上の御趣キ承らんと相述る。使者は聞より無興顔。左衛門ノ尉高則とは。此玄馬いまだ見しらぬ。弟にもせよ家老にもせよ。塩治へ直々進ノ物を送るべしとのことなれば。おことらにいふ詞はなし。とかく塩治に対面し進物披見の其上にて。使者の趣キ語らんと針をふくみし詞の末。心へがたく高則は。イヤ只某名代なれば御進ノ物を拝見と。覆をとればコハいかに。手ごろに角有ルこつは石。山のごとくに積重ね心ばもなき送り物。八幡六郎諸共に興さめて。こそ見へにけれ。

犬養(十二ウ)玄馬あざ笑ひ。其進ノ物を見るからは使者の趣キ語つて聞せん。器量勝れし貞よ姫。帝より賜つてふうふの結びはあやかり物。祝言の夜の石打チは打かたむると悦ぶこと。塩治に直に対面し。真向頬先ききらひなく打かためて祝へよと。主人具親志シの此進物。めでたいことに比興をかまへ。出合ずは塩治が恥辱。取次をしてあはせばよしさなくば奥へふん込んでせひに祝ふて帰らんと。人もなげ成ル無礼の詞。スハことこそと六郎はぜんごを思ふ工夫の体。高則こらへず気色をそんじ。ヤアきつくはい成ル使者の一言。右大臣具親は禁廷にても妨ケしよし。察する所(十三オ)法かいりんき。足元の明い内何となく帰ればよし。異義に及んでふんごまば。諸臈切つて切り捨んと。反打か、ればこなたも身構へ。右大臣家の雑掌玄番。指でもさ、ば忽ち塩治が為ならず。こゝで何かと云はむだこと。いで判官に対面と。奥へゆかんとする所を。高則たまらず短気の病イ。飛か、つて引かづき骨も折レよと投付ケて。つゞいてきらんとする所を。六郎頓而押留。はや御一分の立たるよ。此ふるまひは鹿忽の至り。其に御任せと詞をつくしせいすれば。玄番は漸おき上り堪忍ならずとしかみ顔。八幡六郎しばしとおさへ。物はいひなし聞なしにて。小事も必大事と成ル。(十三ウ)打かためんとの御

進物。かへし申さば無礼なれ共。塩治がやしきへ入りぬればはや御祝義は相すんだり。御祝ひの送り物。主人へ披露仕らん。此場は六郎 噺申す。いざお帰りとぞだてられ。よい折しほと知りながら。思へば無念と人そばへ。立かゝるを高則が。胴切りにしてくれんと。勢ひかゝるふぜいを見て。膝ぶしふるひすゝみ兼。此ぶんにて帰るとも。慮外の段々申シ上。塩治へ当つて意趣はらす。夜がねられまい待ておれと。天窓がち成ルくせとして。足のふるひのとめどなく。進物遣ふて投られて。酒は呑ねどちどり足。よろしくしてぞ帰りける。

高則跡を見送つて打放して捨ん物。残念さ(十四才)よと言ければ。御腹立は尤ながら申シても祝言の夜。ことぶきを納て後。いかやう共はからふへし。玄番が詞をさつするに右大臣具親が。恋の叶はぬ意趣はらし。こよひの内にいか様の狼籍なさんもはかりがたし。某は家中の者にふれ聞せ。外廻りを堅め申さん。やしきの内は御苦労ながら。角々迄にお心付ケ。もし紛れ者候はゞ。密にからめ置キ給へと。心は一致。内外を守りへ入ルさの月の影ふけ行ク。鐘の。声聞て。心うき立ッ新枕。なごやぶすまのやはくと貞よ御前の粧ひは綺ひは綺にもたへぬ色なをし。塩治も装束引キ繕ひ。寝間はいもせの箱の内。雛をならべしごとく也。

貞よ御前は(十四才)面はゆげに。夫をつくぐ打守り。扱もかたい装束や。こよひはしつほり打とけて。互に思ふむつごとを。語り明す物じやげな。人に物を思はして。心にくやと有りければ。

生れ付たる塩治がかた気。祝言には猶以礼義有り。女にたやすく思はれぬは武士たる者の嗜。其方は幼少より雲の上に住なれて。頑なる武家の行跡。見るに付ケ聞クに付嘘やおかしく思ふらんと。謹み深き詞の末。ヲ、きつい御遠慮。その頑

なもの、ふこそ。情深^{ハル}ふて義理^{ハル}つよく。何^{ナニ}ごとを頼^{タノ}でも。引ぬは武士^{ハル}のならひと聞^ク。こと更^{さら}塩冶^{ハル}判官^{ハル}は頼^{タノ}もしい武士^{ハル}と。大内^{ハル}にても隠^{かく}れなし。其頼^{タノ}もしい武士^{ハル}と。大内^{ハル}にても。隠^{かく}れなし。其頼^{タノ}もしいを力^{チカラ}にて。此^{コノ}やしきへ(十五才)参^マりしも。命^{ハル}にかけて自^ミが。身^ミの上に願^{ノゾ}ひ有^アり頼^{タノ}れてさへ給^{タマ}はらば。御恩^{ミコノ}の程^{ハジメ}は忘れ^{ワスレ}じと思^{オモ}ひ。入^{イル}たるさ、めごと。塩冶^{ハル}はふしんの眉^{まゆ}をひそめ。命^{メシ}にかけて頼^{タノ}度^{タビ}いこと有^アりとは。他人^{タニ}にてさへ聞^ク捨^スがたし。い^イか成^ナルことかしらね共^ニ。ふ^{ハル}うふの中^{ナカ}で遠慮^{エンリョ}は無^{ナシ}用^{ヨウ}。先^マ其子^{ミコ}細^{ホソ}何^{ナニ}ごと、。世^セにむつまじく尋^マられ。只^{ただ}よ御^ミぜんは涙^{ナミ}ぐみ其情^{ミナモト}有^アルお詞^{ウタ}は忝^{ハズカシ}ふて恥^ハしく。今更^{イマ}様^{サマ}子を語^カるにも。面目^{オモト}もなき身^ミの上^ノと。さ^{スエテ}しうつむいて云^イいかぬる。

塩冶^{ハル}の弟^ニ高^{タカ}則^ノは。やしきの内^{ウチ}を夜^ヨ廻^マりし。心^{ココロ}を配^クる折^マりからに。夜更^ヨてさ^サゆる睦言^{ムツゴト}にいか成^ナル嫁^{カメ}の顔形^{カガタ}。せめては声^{コエ}を聞^クずと。いは木^キならねば羨^{うらやま}しく。そつとさし足^あみ、よせて。襖^{ふすま}のこな(十五ウ)たに聞^ク共^ニしらず兄^{ハル}の塩冶^{ハル}が声^{コエ}として。コレサ良^よ姫^{ひめ}。猶^{なほ}予^よの体^{てい}は心元^{ココロノ}なし。願^{ノゾ}ひの様子^{さまじ}はいか成^ナルこと。とくく語^カれと問^とければ。語^カるもつらきことながら。いはねば濟^{すま}ぬ身の願^{ノゾ}ひ。自^ミラにはは主^{ぬし}定^{ぢやう}り。いとしいと思^{オモ}ふ夫^{おとこ}あり。暇^{いとま}を下^{くだ}し給^{タマ}はれと。思^{オモ}ひがけなき願^{ノゾ}ひごと。びつくりせしがさあらぬ体^{てい}。フウ左^{ひだり}様^{さま}のこと有^アルまじきことならず。其いひかはしたる夫^{おとこ}とは。公家^{きやう}か武家^ぶか下^げ賤^{せん}の者^{もの}か。品^{しな}によつて密^{みつ}夫^ふさた。事^{こと}おんびんに納^なメたし。侍^うイみやうり頼^{タノ}まる、心底^{しんてい}。有^ア様に申^{まを}されよと。さも頼^{タノ}もしく問^とかけられナフ其^{その}せい言^{こと}の上^のからは。何^{ナニ}を隠^{かく}さん五^ご節^{せつ}の夜^よ。衛^{ゑい}士^しの源^{げん}次^じ郎^{らう}康^{かう}綱^{つな}と云^いふ。つま戸^とに(十六才)忍^{しの}びて自^ミラに。にくからぬ情^{なさけ}の詞^{ことば}。かりの契^{ちぎ}りに二世^{にせ}迄^{まで}と云^いいかはし。其^{その}人^{ひと}ならで一生^{いっしやう}に。枕^{まくら}かはさぬ誓^{ちかひ}立^たテ。又^{また}のあふよを祈^{いの}共^に。無^む官^{くわん}の衛^{ゑい}士^しにあはれぬ身^みの上^の。帝^{てい}の咎^{とが}を恐^{おそ}れてか。幾^{いく}人^{にん}有^アル衛^{ゑい}士^しの内^{うち}。康^{かう}綱^{つな}殿^{どの}のゆく多^{おほ}はしれず。くよくこがる、其^{その}内^{うち}に。思^{オモ}ひもよらず帝^{てい}

より。貞よ姫と名を改め。勅定にての縁組。お前をきらふにあらね共。康綱殿へ心中立す。今此ことを云つらさ。命を捨ての願ひながら身を切ルよりもくるしきぞや。無無体共ひがこと共。御にくしみは有べけれど。こ、こそ武士の御情。能々のこと、推量有り。暇を下し給はらば。生々世々の御恩ぞと。頼む心の(十六ウ)忍びなき。

地に高則膽をけし仰天したる其有様。塩治は不興の体もなく。一々様子聞届けた。忍び夫の有ル女。乞願はず共此方より。暇をくる、筈なれ共。帝より賜りし女。こよひ去ては天子の咎。此こと故と云ひひらかば。塩治が恥辱のみならず。帝の無念を頭はすこと。世の間へ憚り有り。ふうふの縁はきらず共。とかく枕をかはずば。そちが心に叶といひ。勅定も立ち。武士も立ッ。折をうかひ暇をくれん。此詞に相違なしと。聞て嬉しさに余り。忝やみやうがなや。死ても御恩は忘れじと。女心のわりなくも嬉し。涙はせきあへずヤレ音高し人が聞ク。表向はむつまじきふうふの(十七オ)体をもてなすべし。枕かはさぬ契約にてかく指向ふは道ならずと。腰元共を呼出し。祝言の夜は大事と思ひ。夫の傍は心の勞れ。貞よをおくへ同道し。そち達も諸共に。貝合して慰めよと。詞に任せ貞よ姫。嬉しさ余り人々にいざなはへれてぞ入り給ふ。

高則は猶驚き顔。塩治は一ト間に独り言。よしなき妻を賜りて不便のことを聞しよな。色には染ぬ心から障ることなき独り寝を。玉の台とさし込めて夢も結ばぬ閨の内。

こなたに立し高則は聞て悔しくせうしさに。思案くふうのおりも折。八幡六郎が女房立ち野。てうし盃キ。取揃へ。高則の前に畏り。けふ御急ぎの(十七ウ)旅勞御休息も有ルことか。思ひがけなき御宿直。おきばらしにと存まし。取あへぬもてなしなれど。サア酒一つとす、められ。うろくしたる顔付キにて立ち野を急度見るよりも。日比の思ひか当座の恋か。

しなだれかゝる詞付キ。ア、こゝなほつとり者。最前より取まぎれ。めでたい酒しゆゑんに外はづれしに美うつくしい手でお杓しやくとは好む所忝ちがい。とてもものに立ウち野の盃キ。いたフシゞきたいとよりそへば。

ア、勿もちた体たないこと計。先お前からいたゞきましよ。イヤゝゝすゝむるからはてい主役。せ地中び始ウメよとしゐられて。そんなら慮外はおゆるしと。お引キ受ウ呑ウひまも。とやかく思ふ心をしらず。(十八才)頓ウ而ウさしたる盃取リ。忝ハルいと押ウいたゞき。引キ受ウゝ三三こんはず。扱キもみごとおさへにと。つきかゝる手をじつと取リ。そもじの杓しやくならなんはいでも。いつはならずと祝言の夜は。みごとになふてなんとせふいはずと大方道々の目色でもしれたこと。し地中らぬふりはどうよくと。くハルどさかゝれば興色さめ顔。コレゝ申シわけもない。左ざ礼れおつしやるもことによる。八幡六郎と云夫有ル身。塩治様のおみ、へ入地中らば。お前のお為に成りませぬ。ちやつとはなして下ハルさんせと。逃にんとするをどこへ夫。夫の有ルは合点ながら。ほれた物なんとせふ。こよひの祝言の羨うらやしく。云イ出すからは是じが非ひでもいやといはせぬ。六地中郎ウが小言こゝとをいはッ手ウ(十八ウ)討にする迄のこと。今ハルからは我おく様。あたりには誰レもなし。二世のかためをついちよつと。此ハルおびをと手をかくる。コハウきやうこつとふり放はし。ざフしきけたて、逃ハル行クをなを後だより抱だとむる。なふ是誰レぞ出あふてと。声ウより早く塩治判官色。襖ふすま押明ケつ、と出ハル。もつたる手をもぎはなし。つきたをしてハツタとねめ付ケ。い詞き盗ぬ人の不敵て者。一ト間で様子はとつくと聞ク。忠義有ル六郎が妻けがさんとする人非人人。醉地中狂うか乱心らんしんかと。せきにせいたる兄の顔。高高則ちつともひるまず。様詞子を知たと有ルからは。長言こは無益ぎ。立チ野はぜひに我女房。忍地中ぶ内こそ包つもすれ。かく成ル上はかく(十九才)ごの前。妨詞ケする者

あらば親兄弟の遠慮はない。此高則が見入しては人身御供同然と。立あがつて立子野を目がけ。よらんとするを引キもどし。腕捻上うでねぢればさすがの高則。身をちぢめたる有さまを。立子野は今更氣いんげん毒どくさしはしと留るをよせ付ず。立子蹴たちぞにけたをし眼まなこにかど立たテ。言語道断げんごうだつたん不行跡かうせきの科とが。いひ出すも先祖せんぞへ不孝かう。手討てうちにするも合点ながら。おのれは宮路みやぢと云妾腹てかけ。義理有ル弟ていりあるあにと母のゆいげん。命をとらぬはせめての情。かゝる悪ク心こころ有ル者に。やしきの住居思すまひひもよらず七生迄の勘当しちじやうと。下部しもべを呼よよせ云い渡わし。作法さほうのごとく大小とらせ。あほう扱あほうもこらしめの。(十九ウ) 心をしらで詫言わびごとの。中に立子野は手てをつかへ。自みづかラがはしたなふ声立こゑたちテ。かく成なり下くだるはわたしが科とが。我身わがみをつみに行いテ。高則様たかねはおゆるしと詫わ言ごとこがるれば判官はんくわんも。心たゆめどさあらぬ体てい。主まなればこそ身みにかへて詫わ言ごとは殊勝しゆせうと中言ごとながら。却かへ而して奴やつが為ためならず。此こ悪事あくじを捨すておかば猶なほも心のほしいま、。弓箭きうせんにかゝるは治定ちぢやう。たつた一人りの弟あにが不行跡かうせきを禁いましむ。家中うちの見みせしめ武家ぶけのならひ。弟あにでないからは汝な等らが主までなし。遠慮えんりょなくぼつはらへと。詞ことばはつよく心こころには。よしなきことゆへ暫しばらくも。うきめを見する不便ふべんさよと。胸むねに涙なみだはせきくれど。にらみ付みケたる心の内うち。(二十オ) 泣なクよりも猶なほせつなけれ。兄あにの怒いかりを打うテうなづき。礼義れいぎ忘れて高則たかねは。立たチはたかつてにこがり声こゑ。あほうばらひ勘当かんとうとははりが有あて面白おもしろい。日ひチ輪りんはせかいをてらす。僅わずかの部屋へ住す常じやう々つねきつくはい。今は此こま、はらはれても。どうで立子野たちはばふて行いク。それ迄までは此こやしきに。女おんなはしつかと預あけ置おク。判官はんくわん様さまおさらばと。いへどしほる、なり形かたち。立子野たちはいとゞ氣きもき多く涙なみだと共に留とどれど。思おもひ切きつたる塩冶しほぢが不知しらず。ソレ引ひッ立たよの声こゑに連つれ。下部しもべはなごり情なさけなく追おッ立た行いぞせひもなき。立野たちは跡あとに猶なほ涙血筋なみだぢにはなれて判官はんくわんも。涙なみだを催もよほす折をりこそあれ。うら門かどのかたよりも内うちへ投なこむ(二十ウ) こつは石いし。ス

ハ狼籍者ごさんなれ。誰レか有ルと召るれば。八幡六郎長房は。家中を廻り立帰り。かくと聞クより扱こそく。右大臣具親が。是レが恋の叶はぬうらみ。思ひもよらぬうら門より意趣をはらすと覺たり。某宜敷ク防べし端近にてはことあやうし。立子野は御台に付キ參らせ。先々おくへとす、めに任せ頓而へ打つれ入り給ふ。

八幡六郎けらいを呼。うら門の門ぬき。其ま、扉を押よせさせ心を配つて待所に。

ひそく来る足音人音。面ひとつ、みし侍イは。直義の執権測辺伊賀ノ守景忠。犬養玄番諸共にうら門に忍びより。此門一

つ押やぶらば貞よをばひ(二十一才)取り大臣に參らせん。案内は伊賀ノ守と。大ぜい一所に重り合イ。声を合せてゑいやうんと。一度におせばぐはらりひらけ。将基だをしいやが上。うごめく所を八幡六郎。さいぜんの御進ノ物。うぬらをみちんこつぽ石。只今返弁受とれと。当るを幸イ打付投付ケ眼をつぶされ天窓をわれ。測辺ははふく逃て行く。

猶追かけて討とめんと。かけ出んとする所に。逃残りたる犬養玄番。主従以上七八人。椽の下よりかけ上り。玄番はみけんの疵撫上ケ。さいぜん投たる其上に。今門内にてじぎをさせ。面には疵をいたゞいて。おめく帰らば手討は治定。命にかけて相人はおのれ。八幡赦(二十一ウ)さぬ六郎と。恥辱が過てかくごの体。フウ、やさしやしほらしや。此六郎を相人とは。憶病神がかたまつて。死神に成ちごくのかど出。早く暇をとらせんと打つてか、れば拔連て。むらがりよるをこと共せず。こ、やかしこに切りはらひ。追ッ立テ追イふせ三重へ追て行く

逃吠したる犬養玄番。主従三人取ッてかへし。貞よ御前をばひとらんとかけいらんとする所に。八幡六郎ぼつ立く。今こそさいご観念と。おめいてか、ればこらへかね。打合イ切りあふ太刀の影。電光石火の間タなく。けらい一人切りころし。

残る二人を左右にうけ。玄番がいらつて打ッ刀。ひらりとはずせば思はずも。けらいをけさに切り付て。コレハと驚く(十二才) 後より。玄番が首を打放し。につこと笑ふて立ッたるは。こ、ちよかりし有様なり。

今は刀をおさむる祝言千代に八千代にさゞれ石お主をいはほと打かため頓而。小石を海石のいもせをてらす玉柏。心は鉄石身は岩石。家の礎。刃の砥石。忠義に心を沖の石。波の鼓やどうくく。ふみ石溝石石橋の。かゝる勇者の御影石。あふく。扇の要石。末の代迄も碑にいしくも。彫や伝ふらん

第二

水の月は清きに來り。人の情は誠より流れの勤め川竹の。根引キに成りてあふ夜なく思ひはなれぬ參河の国。岡崎の白拍子繁の井と聞へしは。矢矧の軍(二十二ウ)のうさばらし塩冶判官高貞の。かりの契りになれそめて。子迄なしたる中々に。帰洛の後はいかゞ共便り涙に明しかね。塩冶のかたへと思ひ立チ。母諸共に旅の道昔作りはまめやかに。明けて二つの乳のみ子を。大事の孫とだきかゝへ日数。重ねて繁のゐが心計は飛乗の。かごに思ひをつぶくくとはは田口にぞ着にける。

繁のゐかごを乗りはなし。やつすとすれど里詞ナフおろせの衆。太儀であつた休んでと。かごをいなせてコレかゝさん。是が都の入り口ならば。塩冶さんのおやしきへもふ程はごさんすまい。サアごさんせと小裙取り。急ぐ心もゆつたりとあゆみくる(二十三才) わの風俗は。それぞと光る玉鐙の道吹ク風のかほりきて。裾の紅い雪の足人めに留るふぜいなり。

母は見るより袖をひかへ。なんぼいふてもおしへてもくるわのふうが出て気ノ毒。聞た様子が塩冶様はかたい侍イ。其おやしきを尋るとて其風俗ではゆかれまい。ついちよくくとあるきやいの。さいなさふは思へ共なれたことはせふこともない。

お前の風をならふても拍子がなふて行れませぬ。なをらぬことはなんとせふあんじさんすな大事ない。ことしへなつて塩さんよりふつとり便りはなけれ共。矢矯をいなんす折からに追付々迎ひをおこさふと。家老八幡六郎殿を御陣よりの(二十三ウ)使イにて。お侍イのかたい約束けふやしきへ行クとはや。若君のお入り姑御をもてなしと。一家中が上を下却てちが面はゆかる。とはいへ都の勝手はしらず道行人におやしきを。問もつて行キましよと又あゆみ行ク向ふより。うはき遊びの山王参り二人りづれにて出来る。繁のゐ頼而声をかけ。そつじながらおふたりに問ましたいことが有ル。塩治さんのおやしきは都でなんと云所。早ふ行クやう近道にちよつと教て下んせと。いふにこなたもふぜいを見て取り。さつても見ごとな御尋。塩治殿のおやしきより鳥原を問さふな人。けふ山王へお参りの松の位イと見た目はちがはぬ。お名は(二十四オ)いかにとざれかゝる。

テモわるがうなこと計わしらはそんな者ではない。様子有て塩治様のやしきへ行ク者。教てたべと聞クよりも横手を打てコレハ扱。塩治判官高貞とてかたいおかたと聞しにちがひ。貞よ御ぜんと云美しいお内儀様をよびながら。傾城狂ひかコリやならぬと。聞いてびつくり親子の顔。繁のゐは猶胸さはぎ今の詞は聞所。塩治さんのお内儀。貞よ御ぜんと云人は。ところから嫁入りましたへ。フウそれをまだしらずか。矢矯の軍の御ほうびとて。帝様より下されて祝言のすんだはふゆとし。早ふござつて口舌をなされエ、羨しと行キちがひ。腰のあたりを(二十四ウ)ふつつりと。さはらばひやせ山王参り御めんくゝと走り行ク。

跡に親子が顔見合せハツト驚く母よりも。繁のゐは十方にくれさしうつむいて泣キゐたる。

向ふの方よりゆゑ、敷くもけらい引キつれ出くるは。塩冶の家老八幡六郎。日吉の宮へ代参の道繁のみそれぞと待チ顔を。六郎も遙に見付ケけらいを木陰にやすらはせ。其身一人歩みよりはく繁のる殿珍らしい御対面。それ成ルは千代松君ヤレ御けんごで大悦と。式礼すれば繁のあつ、とよつてコレ六郎殿よい所であふたのと。胸ぐら取て引すゆる。コハ何ごと、八幡六郎手向ひならぬ主人のめかけ。母は見るより大たんなど気を(二十五才) あせれば大事な。こなさんはしらんすまい。男畜生塩冶の御家老八まんといふはとのかひ。コレこ、な太こ持チ。たいこ持とはなんのこと。なんのこと、はヲ、にくやとつき放して涙ぐみ。矢矯の軍のかへるさ請出されてもくるわ住居。追付ケ若君諸共に京より迎ひをおこそふと。主の虚にうはぬりして鳴あるいた太こ殿。偽りとは思ひもよらず。八橋村の兄さんが貧しい中でも気楽にくらす母様を。ことはり立てくるわへ引取り。かうくしたこと悦んで下さんせ。お前をやしきへ連行カば塩冶様も御悦び。わしが一つの孝行と此若君を愛するにも。迎ひの人のくるまねして待テ共く(二十五ウ) びんきもなく。余りのなつかしさか、様をつれましてはるくの京上り。けふと云けふ噂を聞ケば使りのないこそ道理なれ。只よ姫とくさり合いしこさふに祝言とは。我身の上の腹立ちよりか、さんへ恥しく。此若君のおひさきは何かならん悲しさに。魂イもきえ胸砕けわしやいきてゐる心はない。それでわしへの詞が立ツか。此若君は見捨てるのか。主が主なりや家老殿こんなしだらになぜしやつた。坊主がにくけりやけさ迄と。恨かこちてせきのぼしむせび。歎くぞ道理なる。

六郎も理にせまり。御腹立の段御尤それ成ルは御母儀とや。主人塩冶判官より使りを致さぬ(二十六才) 其子細は。矢矯の軍は一年計士卒の勞を思召シ。岡崎ノ女房を多く呼よせ主人も共にお慰み。縁でこそあれ御胤やどり。直に越前への出陣

にも御同道とはおぼせ共。元來士卒を懐ん為格外の謀。表テ立て同道あらば色に耽し侍いと。世の欺りは上への恐れ。思ひながらも日を重ね漸旧冬御かい陣。帝より貞よ御前を賜りしは。御主人も某も思ひもふけぬ御祝言。猶此時に便りせばつゝ、むはもる、世のならひ。今暫く折を窺ひ某御迎ひに參る時。段々を申シひらき若君共に御供せんと。主人と相談致せし所。今日ひよし山王へ代參の道す(二十六ウ)から。各に逢奉るは偏に神の引き合せ。聞分ケあつて御帰り下されなば。主君の満足我ら迄いか計大けいと。手をすり頭をさぐれ共繁のゐは猶ふり切つて。何と云共得心は涙にくれてゐたりける。

母は見かねてなふ娘。あなたの咄しの通りなれば塩治様に如在はない。追付ケあの御家老の直に迎ひにこふと有ル。見捨給はぬことならばなんといなふと思やらぬか。ナニヲか、さんの心よはい。たとへ如在がないにもせよ。わしや一ぶんが立チませぬ。なま中に身を請られて塩治様のおく様じや。追付ケ迎ひがくるなど、くるわの衆に羨れ。兄様にことはり立テ。孝行達してお前を引取りお心をやすめる(二十七オ)ことか。岡崎の宿よりは五十里計のうき旅路。くるわの道中とは格別。一ト足も先へと急ぎ漸都のそばへきて。殿御の顔もやしきも見ず。小面のにくいこと聞てすぐく是がいなれふか。恥しいやら悲しいやら心の内のせつなさを。推量してたべ六郎殿とにかくやしきへつれ立て。塩治殿貞よづら三つがなわにせりふして。いひ負たらば舌くひ切りしんで恨をはらして見せふ。サアか、さん立しやんせ六郎殿つれていてと。心つきつめ。身をもがき。恨の涙にゑ返り。湯玉を飛すことくなり。

母も今更詞なく八幡六郎ももてあつかひ。しあんを定めてつゝ、と立チ物をもいはず行んとす。どつこい(二十七ウ)やらぬ

つれテ行ケと。よらんとするを突とばし重ねてよるをハツタトねめ付ケ主人塩治をたふらかす白拍子の偽り女。何偽りとはイヤサイふまい。尤便りのなきを疑ひ都へ上るは去ルことながら。只よ御前と御縁組は帝の刺定ぜひなき次第。ことを分ケても聞分ケず無体にやしきへふん込で。今御ふうふを妨げなば。主人は好色の名をくだし。天子に背く朝敵同前。武士立ねば家もたへ。いたはしや若君は一生賤しくくち果て。御親子共に末代迄恥辱を残し給ふは治定。塩治殿か床しいの若君がいとしいと。口先キ計は人らしく。実に御為を思はざる心と詞は万里の相違。無理無法の女(二十八才)やしきへ来らば命の極め。とはいふ物のナウお袋。つれ立てお帰りあれ。太切な若君をお預け申置けからは。主人が見捨ぬ慥なせうこ。折を窺ひ某がお迎イに參る迄。御不自由になきやうに宜敷ク便り致すべし。一応も再応も。娘御の合点の行ッやうに申シふくめる気はないか。扱もどかしや片いちやとおどしすかしつ恥しめつかぞへならべて八幡が。心の内ぞ類ひなき。

繁のゐは猶涙母は一々聞分ケて。娘のせなを撫おろし。今の様子をき、やつたるそなたが心一ツにて。三方四方の為ならず。塩治様を思ひ過し却て仇を引おこし。若君やそ(二十八ウ)なた迄もしものことの有ルならば。此母は何とせんもはや恨も疑ひも。思ひはらして戻つてたも六郎殿のお詞が。若此上に違ひなば其時はそなたより此母が聞ませぬ。真実の孝行ならば聞分ケてたも繁のゐと涙と。共にせいすれば。娘は顔をなきはらし若君にもあはせし。なつかしい殿御の顔。あひたい見たいと一ト筋にはるぐときた物を。ぜひにやしきへいこふといへば恋したふのは偽りと。六郎殿の詞の末。つれないこと、は思へ共。か、様への孝行ならばハテなんとせふにませふ。とはいへくるわを出る時に皆打そろふてめでたいと。出口迄送られた身が。かうしたわけといひ(二十九才)立て岡崎へは戻られず。八ッ橋村の兄様へも何面目にいなれふと。思

ひむすばれせき上^中テ泣^中クシヨリ。外^{ハル}のことぞなき。

見^{地色中}るに六郎^{ハル}かくしなき母^ウもせきくる涙^色をおさへ。ナフこ、な者。くるわのことは尤^ハじやが血^チを分^クテた兄弟^ニに。何^ニ恥^カしいこ

とが有^ル。此母^ガわけ云^テ八ッ橋^ウ村^ハへつれて行^ク。ヲ、けな者^シやよふ聞^ケテた。得^テ心^ノの上^ハは六郎^殿必^ニ詞^ニちがひなう。三河

の国^ノの八ッ橋^ウ村^ハ花^ノ守^ノの喜^ト作^トと尋^ニ。追^付ケ迎^ヒを待^マすと聞^テ六郎^逢にすさり。お為^ヲを存^ジテか^リ初^ニにも。過^言申^セし慮^外の

段^真平^平。御親^子の御心^底主人^ヘくはしく語^リ。御首^尾を取り^マかなひ追^付ケめ^テたふ御^迎ひ。(二十九ウ) 某^ハ日吉^山王

ごんけんへ主人^ノ代^参時^ウつる。必^御さ^タ御無^用とけ^ラい共^ヲ呼^出し。早^お暇^と云^ニに付^ケ繁^ノの密^ニに詞^詰。約^束か^タき侍

イの。忠^義に心^クも^リなく日吉^ノ宮^ヘと別^レ行^フ。

母^ハ娘^ニ力^ヲを付^ケ思^ヒしこと^ノ叶^ハぬ後^ハは。必^願ひ叶^フとや今^ハはほいなくいぬる共^ニ。六郎^殿の詞^もあ^レば。此^後は快^ク御

迎^ヒのきた時^ニに。今^ノつらさは何^レごと^もむかし語^リとなりやせん。思^ハばふかい楽^ミとさま^くす、めいざなは^レ。心^も足

もよはく^とこ、にきゆべきあ^ハ田^口。親^子の涙^テりう^つる。日影^ハ七ッ八ッ橋^ノのさ^とへ^と。つ^レて三^重へ帰^リけ^り

世^ニに良^薬有^リといへ共^ニ其^ノ病^根をし^らず^シて。(三十オ) いかでか治^スる^{コト}を得^ン。征^夷將^軍義^詮の御^叔父^ニ。心^足利^左

馬^ノ頭^直義^朝臣^ノの御^病氣^ハ。去^年の秋^{ヨリ}引^籠り年^も又^クれ春^過て。弥^重しと一^家中^取々^騒ぐ其^中に。執^権源^朝臣^ノ伊^賀守^景

忠^ニ。只^一人^ノの御^看病^{。それ}より外^ハ誰^レと^も対^面さら^にゆるさ^ねば。何^ノ病^イと白^書院^御見^舞の典^薬も。病^家へ通^らば討

捨^ト。心^ほどけぬ糸^脈を。押^ハは^かられぬ病^イの床^{。ふ}し^ぎをな^せる計^也。

あ^また出^入門^前にそれ^ぞとよ^{ける}侍^イは是^も御^家の執^権高^ノ武^藏守^師直^{。御}病^氣見^舞は常^よりも折^目正^しき上^下に。角^ひ

れも有ル男ぶり。かくと(三十ウ)見るより伊賀ノ守おそばさらすの髭のちり。取次せんと立出る。武蔵ノ守座をかまへ。主君直義の御所勞。貴辺看病御くらうく。先頃は只当分の事と計。疎にさた有しが。日数積れば氣遣はしく。御見舞の爲參上。いざ御前へ同道と。立んとするをしばしとおさへ。心に忘れず御見舞主君も嘸や御満足。某宜敷申上ん御めみへは無用也。是より直に帰られよと云をうちけし。アラ聞にくきあいしらひ。御見舞申スとは御病体を見聞。御本復をなさん爲。御辺も我もかたをならぶる執權職。御前へ通るを無用とは舌の(三十一オ)根長き測辺の一言。返答有ルやと云かけられ。伊賀ノ守膝立テ直し。其詞こそ過言至極。御病家へ通ること御赦免は某一人。其ほか一ツ家中典藥の頭迄も糸脈を以て窺ひ。御前へ来らばお手討との仰。但命はおしうないかといはせも果すあざ笑ひ。和殿は命がおしき故武士の作法を忘れしナ。武家に生れて主君の爲。命を果すは戰場も畳の上も同じこと。お手討にあへばとて。御病氣を何病と弁ざるは不忠の臣。先達而かくと聞キ今日の推參は。御手討合点帰らぬ合点。命をすて、の御見舞と。云に口あく伊賀ノ守一本ンさ、れて(三十一ウ)扣ゆれば。心しづく御病家を。さして襖のト重ごし。命を的に立テかゝるやたけ心そ。不敵なる。

寝所に向ひ高声に。高の武蔵ノ守師直。御病体を拝せん爲御傍へ推參と。聞クよりさつと襖を開き。内に足利直義公脇息によりながら。大太刀を杖につき。病苦にやつれて頬ほねあれ。削過せし夜叉の顔。氣力は落ぬ銅突声。ヤア命しらずのしれ者。病家へよらば討捨との。主命背く不忠の臣。一家中の見せしめに。首打チはなすかくごせよと。怒の面色息遣ひ。あらけしからず。見へにける。

師直ちつ共驚かず。間近くよつて首さしのべ。しりめに顔を打詠。御病氣(三十二オ)見舞の此師直。手討にせんとそれ程

に。気色遊ばず御病体何よりは先大悦。直に様子を見届んと存じ込んたる某に。かくごせよとは御意に及ばず。一家中御手医者にも対面ゆるさぬ病の名。何と弁へ療治の程。御自身に遊ばすや。主君の病に医療も加へぬ。御傍さらずの測辺が詞。甘い計は毒の基。師直医家には生れね共其病性を聞クならば。医案書にも及ばすして。療治の便りと成り申さん。討の討ぬの差別なく。臣下の命は君の物。御承引なく討るゝ共。魂イは皮肉に入。病をしらで有べきか。かく迄つくす忠義の程少しも胸に徹しなば。御心腹を明させ(三十二ウ)給へいかにくと話かくれば。直義ぜひの返答なく。大太刀ぬいてひらめかし。目にさし付る危うさは。身にかゝらねど伊賀ノ守。見ればするどき刃の下。首さし付ければ引ッそばめ。顔詠むれば又ふり上ケ。たゞよひかざす太刀の影。すりよる命は露ながら。風にゆられて照薄。案山子を打ッがごとく也。